

## 第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

カテゴリー	一般演題口演
タイトル	気管切開管理を行っている在宅療養患者における下気道細菌叢に関する検討
日時	平成 25 年 3 月 30 日 10 : 40~10 : 50
会場	第 8 会議室
座長	村山大和診療所 森 清先生
演者	東京女子医科大学東医療センター 山中 崇先生
企画趣旨	<p>【目的】気管切開管理を行っている在宅療養患者を対象に、下気道細菌叢について調査することにより、実態を把握し、日常ケアにおける注意点を明らかにすることを目的に検討を行った。</p> <p>【方法】東京女子医科大学東医療センター在宅医療部から訪問診療を行っている対象者のうち、2012年9月~11月の間に気管切開管理していた7名を調査の対象とした。このうち5名が陽圧式人工呼吸療法を行っていた。年齢は14歳~75歳。気管切開術後の経過期間は1年9ヶ月~20年3ヶ月。基礎疾患は筋萎縮性側索硬化症3名、進行性筋ジストロフィー1名、脳出血後遺症1名、シュプリンツェン・ゴールドバーグ症候群1名、蘇生後脳症1名であった。これらの対象者に対して、気管切開部から気管吸引用キットを用い、気管内に吸引チューブを挿入し、気管吸引物の細菌培養を行った。</p> <p>【結果】細菌培養の結果、8菌種分離された。P. aeruginosa が7名中6名で認められ、そのうち1名はMDRPであった。S. marcescens が7名中2名において認められた。その他、K. oxytoca, P. mirabilis, P.stuartii, S. aureus, S.maltophilia, B. cepacia が分離された。いずれも検査の時点で気道感染症は発症していなかった。</p> <p>【考察】在宅療養患者のうち、気管切開管理を行っている対象者に対して、気管吸引物の細菌培養を行った結果、P. aeruginosa が7名中6名ときわめて高頻度に分離された。これまで、入院患者を対象とした調査において、気管切開部位からの吸引痰の細菌培養の結果、P. aeruginosa、S. marcescens の分離頻度が高いことが示されている(田野吉彦、他:感染症誌 66(5) 592-598, 1992)。在宅医療の場においても入院患者と同様の傾向がある可能性が示唆された。気管切開術後の気道管理では、口腔・咽頭の感染管理が重要であることが知られており、口腔ケアの重要性を再認識する必要がある。また、気管カニューレ交換や気管切開部から喀痰吸引する際、訪問診療を行う医師はスタンダードプリコーションに努める必要があると考えられた。</p> <p>【結論】気管切開管理しながら在宅療養している患者において、気管吸引物から高頻度に P. aeruginosa が分離された。</p>